

1. サヨウナラ銀座の都電
2. 12 才になった「技術士」
3. 人と水との和を求めて
4. 歴史を予告する明哲さを



1. 「銀座通りを最後の都電が走る」道路交通の変せんにともない、都電もついにその地位を地下鉄にゆずらざるを得なくなった。軌道を撤去したあと、歩道を拡幅し、軌道敷に敷いてあったみかげ石をみがいて、歩道に敷きならべるといふ。これは大変結構な計画であると思う。いっそ思いきって建物の間に全部敷きならべて、歩道にしてしまっただろうか。現在の銀座通りは、歩行者の数に比べて歩道が狭く、人波が歩道にあふれ、車道を横断するときは、自動車を気にしながら渡るといった状態である。車道は地下にもうけるか、せいぜい地区の外周までとして、安心して、買物や散歩のできる憩いの場としたい。副都心、駅前広場、盛り場などで都市施設が計画されるさいには市民生活と密着した、しかも歩行者を尊重する立場が、十分折り込まれることを望みたい。

[J]

2. 「技術」に対する考え方において画期的な技術士制度が施行されて今年で 12 年目を迎える。この間に生れた建設関係の技術士有資格者は、先頃行なわれた第 10 回試験の合格者 348 名を含め 3858 名に達している。これに平行して建設コンサルタント業の成長は、質量ともに目覚ましいものがあり、本会でも会員の 6.9% 約 1400 名がこの職業についている。

コンサルタントの比重は、社会の専門化とともにますます大きくなって行くと思われ、人によっては、これを成長産業のトップ クラスに入れるほどである。

ところで長期的には大きな展望を持ちながらも、現状ではその名にふさわしい活動は非常に少ないといわざるを得ない。その原因については、種々な観点から論議されているが、さらに精神的風土——アイディアや知識はタダという——も大きく影響しているようである。

技術士制度は曲りなりにもここまで育ててきたのであるが、この風土の中に果たしてどのように開花して行くであろうか。

[C]

3. 6 年も前から懸案の、筑後川の水資源開発が、ようやく関係各県知事の話し合いまでこぎつけた。これまで、話し合いが遅々として進まなかった理由には、いろいろ言いぶんもあるだろうが、結局のところ、いろいろな利害関係が入りまじっていることに原因があるのは、御多聞に洩れない。筑後川ともなれば、何らかの形で利害に関係する人は、恐らく九州人口のなかばを越すことであろうから、それらの調整に、いわゆる高い立場の政治的な考慮が必要となるのは、当然かも知れない。

この夏の水害・干害を見ても、水を治めることのむずかしさはいうにおよばないが、それ以上に、人を治め、水を治め、その上に水と人との和を図ることのむずかしさを痛感した。

形こそ全くちがうが、筑後川の水資源開発は九州の発展を左右する要であることを考えると、政治家ならぬ土木技術者も、いかに人を治め、いかに水と人との和を形づくるか、理想的な開発の実現に努力してゆくべきであろう。

[S]

4. このほど訪日されたイギリスの生んだ偉大な歴史学者アーノルド・トインビー博士は、数十年前アメリカで講演を行ない、日米開戦から日本の敗戦を予告すると同時に大英帝国の地盤沈下を述べられた。結果的には、この講演の意味したところはすべて歴史のうちに書留められたわけであるが、この冷徹なまでの予告は飽くことのない学問への情熱に裏うちされた成果といえよう。

イギリスに国籍を有する博士が、自国の凋落を予告するつらさは人一倍かと思われるが、このたびのポンド切下げの与えたショックとともに思い出された。ひるがえって考えてみるに、激増する都市災害はすでに人の生活する都市を忘れた計画の産物とも考えられるし、精確な将来予測ができなかった技術陣の敗北ともいわれても仕方があるまい。大きく動く世界の歴史の歯車の一つとしての「土木技術者」の大きな判断は、世をあげて待たれてはいる今日このごろではなかるうか。

[E]

第 52 巻 第 10 号から第 12 号までの本欄の執筆者は、J. 吉田正吾（鹿島建設）、S. 進藤忠夫（東京都）、C. 本山 翫（建設省）、E. 事務局の四名でした。